

# 2022 年度事業報告

(自 2022 年 2 月 1 日～至 2023 年 1 月 31 日)

公益社団法人 日本薬学会

## I はじめに

日本薬学会は薬学における中核的学術団体として、医薬品の創製、製造、有効性と安全性、供給、適正使用、生体での作用機序に関する情報発信・交換・支援をはじめ、広く医療機器、再生医療、予防医学や生命科学に関する学術や産業の発展に貢献してきました。また薬剤師教育・薬学に関わる人材育成に関して文部科学省、厚生労働省、日本薬剤師会、日本病院薬剤師会、医薬品関連産業界や健康・医療関連産業界等との連携を基に、責務を果たしてきたと考えています。2022 年度に取組んだ主な事項について以下に示します。

- ① 日本薬学会の最大の学術活動となる第 142 年会（名古屋）が、2022 年 3 月 25 日～28 日に「創薬イノベーションが切り拓く新時代の医療」をテーマに、名城大学の森裕二組織委員長の下で、新型コロナウイルス感染拡大の影響でオンライン開催されました。
- ② 学会の支部・部会は、支部長会議と部会長会議の交流を通じて互いの位置づけを共有した上で、個々の計画に基づき活発な学術活動を展開しました。
- ③ 学術誌の更なる充実発展を目指し、Chemical and Pharmaceutical Bulletin、Biological and Pharmaceutical Bulletin について、毎月 Newsletter を配信すると共にファルマシアにグラフィカルアブストラクトを毎月掲載しています。論文受理から発行までの期間の短縮、投稿数増加、被引用回数の増加を目的に、2022 年 2 月号から冊子体を廃止し、電子ジャーナルとして発行しました。生物系オープンアクセスジャーナル BPB Reports も既に第 5 巻が発行され、順調に論文が掲載されています。また、審査に貢献した査読者、被引用数の高い論文、掲載数の多い著者を選考し、賞を授与しました。学会誌ファルマシアは本学会会員を含め、多くの薬学関係者への有効な情報提供を継続しています。また、ペーパーレス化推進のため、電子本の発行を始めました。
- ④ 学会主催の創薬セミナーはコロナ禍の影響のためオンラインで開催致しました。2022 年度は最初の取組として、「学位（博士）取得者のキャリアデザインに関するワークショップ」をオンラインで開催致しました。新型コロナウイルスワクチンおよび感染症に関する公開シンポジウム、並びに薬学教育や薬剤師プロフェッショナリズムをテーマにした公開シンポジウムを日本学術会議と共同主催の形式でオンライン開催し、多くの視聴者を得て、情報発信として十分な成果が得られたと考えています。
- ⑤ 今年度も長井記念薬学研究奨励支援事業により博士課程大学院学生の勉学支援が行われました。また、博士学位取得後、研究者として活躍されている本支援の受給者を表彰するために 2021 年度に新設した「長井記念若手薬学研究者賞」を今年度も受賞者を選考しました。
- ⑥ 本学会の「男女共同参画社会づくり宣言」女性研究者のキャリアアップ並びに研究活動の支援を進めるために 2021 年度に新設した「女性薬学研究者奨励賞」を今年度も受賞者を選考しました。
- ⑦ 国際交流活動を活発に展開し、第 142 年会における FIP（国際薬学連合）会長講演（オンライン参加）を行い、さらに最初の試みである「アジア・太平洋からの新しい薬科学

者の息吹」をオンラインで開催しました。なお、国際連携活動の見直しのため FIP から退会しました。このほか、ドイツ薬学会 (DPhG) からの講演者を第 142 年会 (名古屋) (オンライン) および第 39 回メディシナルケミストリーシンポジウムに招待しました。韓国薬学会 (PSK) 秋の大会にシンポジストを派遣し (オンライン参加)、また会頭が現地にて参加し代表者交流を行いました。ドバイ国際医薬品会議 (DUPHAT) との連携では、主催者からの要請に応じ、シンポジストを派遣しました。発展著しいアジア諸国と、次世代の薬学研究を先導する人材育成に資する連携を強化することを目標に、第 143 年会 (札幌) では「次世代薬学アジアシンポジウム」を計画しました。さらに第 143 年会 (札幌) では、2020 年に初めて合同シンポジウムを行ったカナダ薬学会から講演者および学生を受け入れ、2 回目となるシンポジウムを企画しました。

## II 事業実施状況

### 1 代議員総会の開催

日 時：2022 年 3 月 25 日 (金)  
場 所：ビデオ会議 (zoomにて開催)

### 2 学術研究・教育活動の推進

#### 1) 学術誌の発行・表彰

##### (1) 学術誌の発行

学術誌の特性を最大限に活かした原著論文・総説の掲載により、薬学ならびに関連分野における科学の発展に寄与してまいりました。

本学会の学術誌への投稿意欲を高めるために、査読期間の短縮、出版までにおける作業の効率化を継続的に推進してまいりました。

YAKUGAKU ZASSHI では臨床薬学領域研究の多様化に対応するため、臨床薬学領域の英文投稿およびケースレポートを受け付けました。

英文誌ではテーマを絞った、興味深い内容のカレントトピックスを掲載しました。また、発行日にあわせ Graphical Abstracts を掲載した HTML 形式のニュースレターを継続して配信してまいりました。

英文誌はオンラインジャーナルのみの発行といたしました。

2022 年度の学術誌の刊行は、以下のとおりです。

##### ① YAKUGAKU ZASSHI 第 142 巻

掲載論文数：156 編／昨年比 2 編増

(早期公開 8 編／昨年比 3 編増、英文投稿 11 編／昨年比 3 編減、臨床薬学領域 31 編/昨年比 5 編増 (誌上シンポジウム除く)、ケースレポート 6 編/昨年比 3 編増)

発行部数：600 部 (月刊)

##### ② Chemical and Pharmaceutical Bulletin(CPB) 第 70 巻

掲載論文数：131 編／昨年比 27 編減

(早期公開 18 編／昨年比 5 編減)

##### ③ Biological and Pharmaceutical Bulletin(BPB) 第 45 巻

掲載論文数：253 編／昨年比 7 編減

(早期公開 48 編／昨年比 2 編減)

##### (2) 授賞

学術誌発行において審査に貢献した査読者、被引用数の多い論文、掲載数の多い著

者（連絡著者に限る）を選考し、賞を授与いたしました。

- ① Top Reviewer Award  
YAKUGAKU ZASSHI、CPB、BPB（各1件）
- ② Highly Cited Review Award、Highly Cited Article Award  
CPB、BPB（各1件）
- ③ The Most Published Author Award  
CPB（2件）、BPB（3件）

## 2) オンラインジャーナルの発行

生物系オープンアクセスジャーナルのBPB Reportsでは、投稿者の幅広いニーズにこたえるため、学術誌3誌にはないReportという論文カテゴリーを設け、掲載を行ってまいりました。

2022年度の発行は、以下のとおりです。

BPB Reports 第5巻

掲載論文数：28編（昨年比9編減）

## 3) J-STAGE との連携

### (1) 学術誌のオンライン公開

高度情報化社会の趨勢と、本学会の公益性を視野に、YAKUGAKU ZASSHI・CPB・BPBを年12回の発行日と同日にJ-STAGEにて全文公開をいたしました。また、BPB ReportsはホームページならびにJ-STAGEにて全文公開をいたしました。

### (2) 会誌のJ-STAGE公開

ファルマシアは、最新号の本文を年12回の発行日と同日にJ-STAGEにて公開いたしました。執筆者のご希望により、本誌でモノクロ掲載としている図をJ-STAGEでは電子付録にてカラー公開いたしました。なお1年未満の記事公開は会員限定としております。

### (3) 部会誌のJ-STAGE公開

MEDCHEM NEWSは年4回（2月・5月・8月・11月）の発行日と同日にJ-STAGEにて全文公開をいたしました。なお1年未満の記事公開は医薬化学部会員限定としております。

### (4) ジャーナルコンサルティング事業への参加

CPBを対象にジャーナルコンサルティング事業に参加し、「ジャーナルの質向上」に関する取り組みを進めてまいりました。CPBとともにBPBを含め、次の段階に移行する調査・準備を行いました。

## 4) 学術研究集会の開催および部会・支部活動の支援

### (1) 年会の開催

年会は、領域の異なる研究者が一堂に会して、薬学の進歩を横断的に知ることのできる全国規模の大会です。特にシンポジウムの企画・募集にあたっては、多様な領域を包含できるものとなるよう留意してまいりました。第142年会および第

143 会について、組織委員会を中心に次のとおり企画しました。第 142 年会は新型コロナウイルス感染状況を鑑み、オンライン開催としましたが、第 143 年会は 3 年ぶりに現地にての集合開催とオンライン開催のハイブリッド開催としました。

①第 142 年会（名古屋）

日 時： 2022 年 3 月 25 日（金）～28 日（月）

場 所： オンライン開催

テーマ： 「創薬イノベーションが切り拓く新時代の医療」

組織委員長： 森 裕二（名城大学薬学部）

②第 143 年会（札幌）

日 時： 2023 年 3 月 25 日（土）～28 日（火）

場 所： 北海道大学

テーマ： 「ファーマサイエンス：つながる・つきぬける」

組織委員長： 南 雅文（北海道大学大学院薬学研究院）

## （2）部会の活動

部会は、薬学研究の高度化と若手研究者や薬学生の育成を共通の主要課題とし、シンポジウム、フォーラム、研究会等を開催するとともに、創薬研究者の育成等、各部会の環境、状況にあわせて特色ある活動を進めてまいりました。また、部会間で協力し、他機関との連携を図りました。本年度の部会活動の詳細は（別紙 1）のとおりです。

## （3）支部の活動

支部は、地域ごとに会員が日本薬学会を身近な存在として活用できる場です。学生会員の積極的な参加を促す学術集会、地域薬剤師会との交流、薬学講習会での最新情報の入手、支部表彰事業ならびに高校生への薬学ガイダンス等地域の特性を生かした事業展開を行うよう努力してまいりました。一般社会へ薬学の正しい理解を広げるとともに、若い世代へ積極的に働きかけを行い、会員増強運動を進めました。

本年度の支部活動の詳細は（別紙 2）のとおりです。

## （4）創薬セミナーの開催

本セミナーは、創薬に係わる最先端の話題と情報を提供し、今後の創薬に関して有益な議論をする場として、毎年開催しております。しかしながら、第 37 回セミナーは、コロナ感染症拡大の状況を考慮し、従来からの合宿形式での開催が困難と判断し、オンラインにて開催させていただきました。

・第 37 回創薬セミナー

日 時： 2022 年 7 月 7 日（木）～ 8 日（金）

場 所： オンライン開催

参加者： 計 176 名（有料参加者 134 名：会員 31 名・  
非会員 84 名・学生会員 19 名、関係者 42 名）

オンデマンド視聴数： 計 261 回

2023 年度開催の第 38 回創薬セミナーは現地開催を予定しております。

日 時： 2023 年 7 月 12 日（水）～14 日（金）

場 所： Royal Hotel 八ヶ岳

## 5) 学術研究・教育活動の奨励・表彰

### (1) 研究奨励

日本薬学会では、博士の学位を有する多様な薬剤師あるいは薬学研究者の輩出により、薬学のさらなる発展に資することを目的として、日本薬学会学生会員が学位取得を目指して研究に専念するための奨励支援を行うべく、2015年度より採用者へ奨励金貸与を開始しました。2016年度より設置した長井記念薬学研究奨励特別委員会では、運用手続きの整備を行いました。当年度採用者を加え、貸与を継続し、また、選考委員会による選考結果を受け、2023年度採用内定者を決定しました。2022年度から顕彰事業として「長井記念若手薬学研究者賞」の授与を開始し、奨励金が如何に役に立ち、研究に向き合うことができたか、現在の研究状況、将来の抱負等の採用者からのメッセージを、ファルマシアおよび年会シンポジウムにて公表しました。

### (2) 授賞

薬学研究の奨励・表彰は、日本薬学会の目的である薬学の進歩・普及にとって重要な事業です。2022年度より女性薬学研究者奨励賞を新設するとともに、佐藤記念国内賞の受賞対象をより明確にするためその名称を佐藤記念 医療貢献薬剤師賞に変更しました。それぞれの授賞規定に基づき各選考を実施し、その公正な選考結果を受け、2023年度学会賞受賞者を決定しました。奨励金の受領を終了し博士の学位論文提出から5年後の活動調査で、薬学の発展に寄与する強い意志を持って活動している研究者を表彰し、「長井記念若手薬学研究者賞」を授与しました。

① 薬学会賞	4件
② 学術貢献賞	0件
③ 学術振興賞	6件
④ 奨励賞	8件
⑤ 女性薬学研究者奨励賞	2件
⑥ 創薬科学賞	2件
⑦ 教育賞	1件
⑧ 功労賞	0件
⑨ 佐藤記念 医療貢献薬剤師賞	0件
⑩ 長井記念若手薬学研究者賞	8件

### (3) 他機関関係賞等への推薦

各財団・機関から本学会への関係賞等の推薦依頼に対し、会員から候補者を選考し、推薦しました。さらに、国（省庁）による表彰について会員から候補者を推薦しました。

## 6) 薬学教育基盤の整備

“薬学教育”は薬学における学術活動を担う人材を育成するものであり、日本薬学会会員にとって学識を身につける基盤である。本学会員である大学教員、薬剤師および創薬研究者には、変化する社会と進歩する医療・科学技術をリードする学識と学術活動が求められている。これらを網羅して大学での薬学教育課程だけで修得することは不可能であり、生涯にわたって研鑽を続ける必要がある。したがって、“薬学教育”は大学での卒前教育に限定されるものではなく、卒前・卒後のシームレスな“薬学教

育”の重要性が増している。

薬学に関する学術の進歩を持続するためには学術活動に従事する人材育成が欠かせない。しかし、現在は大学院博士課程への進学者が激減しており、今後、研究能力を身につけ博士として学術を推進する人材（学会員）が不足する懸念が生じている。そこで薬学教育委員会は、本学会の目的である「薬学に関する学術の進歩および普及をはかる」に沿って、今後の学術進歩を担う若手人材の育成に貢献する活動を2022年度より開始した。

### (1) 学位取得者のキャリアデザインに関するワークショップの開催

本年度の薬学教育委員会事業「大学での教育研究活動をサポートするファカルティ・ディベロップメント」の目的と内容について検討し、学位を取得してアカデミアや医療機関、企業等で活躍中である若手博士達の現況やビジョン・ニーズ等を聞くワークショップを企画いたしました。長井記念若手薬学研究者賞受賞者や長井記念薬学研究奨励支援事業採用者、全国学生ワークショップOBおよびOGに参加協力を依頼し、29名が参加してオンライン形式でワークショップを開催いたしました。ワークショップのプロダクトは報告書としてまとめ、日本薬学会のホームページで公開すると共に各大学および関係機関・団体に送付する予定となっております。

・学位取得者のキャリアデザインに関するワークショップの開催

開催日：2022年11月13日（日）

形式：zoom

実行委員長：中村明弘（昭和大学薬学部基礎医療薬学講座薬剤学部門）

### (2) 大学院進学促進事業の企画

本年度の薬学教育委員会事業「大学院進学促進事業」については、学部学生を対象としたワークショップの開催を企画しております。ワークショップの参加対象者は、3～4年生を中心にしつつも、研究室配属を行う時期が大学で異なるため、本企画の趣旨に適した学年の学生を各大学から推薦していただくことにいたしました。3～4年生を中心に複数学年の学生が参加できる開催時期について検討した結果、8月の開催が最適ということで委員の意見が一致し、2023年8月開催に向けて企画の議論を行っております。

### (3) 第三者確認作業

社会に資する生涯研鑽支援活動の一環として、健康サポート薬局に係る研修プログラムを確認するための第三者機関として、2016年に厚生労働省から本学会が指名を受け、2020年度からは、特別委員会として設立されております。活動につきましては、前年度までに適合とした7機関からの更新申請を受けて確認作業を行いました。

## 3 学会情報の配信

日本薬学会の大きな役割に、信頼できる科学情報を社会に発信していくことが挙げられます。薬学関連の学術教育研究、医療における薬学の貢献、さらには薬学分野の行政・産業等に関する最新の動向を、会員間のみならず広く社会と共有し、医療健康福祉社会

の発展に寄与するために、適切な手段や機会、あるいは媒体を準備・提供し、会員相互および会員と非会員あるいは社会一般との間で接点を拡大し、情報交流を促進しました。

### (1) 社会への発信

日本学術会議声明「内閣府『日本学術会議の在り方についての方針』（2022年12月6日）について再考を求めます」を全面的に支持し、声明「日本学術会議の独立性担保」を発出しました。

年会組織委員会と広報委員会の共同発行による「講演ハイライト」にて、本学会会員の活動の紹介を行いました。

### (2) 会誌の発行

会誌「ファルマシア」は、会員の広報誌として内外の情報を分かり易く提供し、また会員相互のコミュニケーションの円滑化をはかることを基本として編纂しております。学会広報および情報誌として一層の充実をはかるべく、特集号（6回）とミニ特集号（6回）の企画を含め、年間12号の発行を実施しました。J-STAGE 掲載の周知や最新情報の発信に向け、HPの迅速な更新に努めました。

第58巻            発行部数   約14,000部（月刊）

### (3) ホームページの更新

対外的にも興味を持っていただける情報発信を強く意識しつつ、一方で薬学に係る若い世代へエールを送り、薬そのものや学会活動に関心を高めていただけるよう、学会の最新情報の掲載ならびに会員へ向けての情報公開に努めました。より見やすくわかりやすい構成とすることを目指し、2023年6月公開に向けてホームページの全面リニューアルを進めています。一般からのアクセスも多い「薬学用語解説」については、部会の協力のもと、掲載語の見直しを行いました。ホームページのリニューアルと合わせて全面リニューアルの予定です。

### (4) メールマガジンの配信

メールマガジン「ファームナビ」にて、配信を希望する会員登録者に日本薬学会の動向やメッセージを配信することにより、学会情報の共有化をはかりました。会員への一斉連絡用のツールとしても活用しています。

配信12回   配信数   15,673名（平均）

また、学術誌編集委員会の英文ニュースレターを通じて、年会、その他シンポジウム等の広報活動を行いました。

### (5) 出版物

薬学紹介小冊子、「高校生のための薬学への招待」と「これから薬学をはじめあなたに」は2021年2月の全面改定以来、累計28,000部が利用されました。高校生の進路指導資料として、あるいは薬系大学・薬学部1年生のガイダンス資料として活用されることで、薬学ならびに薬学部への正しい理解と知識を深めることに寄与しています。今後、より多くの高校で「薬学」を進路として認識されることを目指して活用を進めます。

## (6) 会員向けお知らせページの活用

2022年6月に稼働開始した新会員システムの機能です。本年度は主に会員向けの事務連絡での使用を開始しました。より積極的な活用を目指します。

## 4 他機関との交流協力とグローバル化の推進

### 1) 他機関との交流協力

他機関との交流と協力をはかり、広く社会に貢献するよう努めました。

#### ① 日本学術会議との連携

薬学の存在感を高めながら、我が国の科学技術の推進に寄与するため、科学者コミュニティを代表する機関である日本学術会議薬学委員会との連携・協力を保ち、共同主催にて以下のシンポジウムを開催しました。

- ・「新型コロナウイルス感染症の予防と治療 Up-to-date そして変異株への対応」

日 時：2022年2月5日(土)

場 所：オンライン開催

共同主催：日本学術会議、日本医学会連合

- ・「21世紀の新しい人材育成に向け薬学教育はどこへ向かうか？」

日 時：2022年11月26日(土)

場 所：オンライン開催

共同主催：日本学術会議薬学委員会化学・物理系薬学分科会、  
薬学委員会薬学教育分科会

- ・「薬剤師のプロフェッショナルリズムを考える」

日 時：2023年1月22日(日)

場 所：オンライン開催

共同主催：日本学術会議薬学委員会、日本医療薬学会

- ・「新興・再興感染症の克服に挑む ～COVID-19との闘いを経て～」

日 時：2023年1月13日(金)

場 所：日本学術会議講堂およびハイブリッド開催

共同主催：日本学術会議薬学委員会生物系薬学分科会、  
薬学委員会薬学教育分科会

#### ② 共催・協賛・講演

本学会と密接な関連をもつ団体の講演会、学術集会等の開催を共催、協賛あるいは後援し(国内126件、国際7件)、積極的に支援しました(別紙3)。

#### ③ 日本化学連合(一般社団法人)への参画

本団体は我が国の化学および化学技術関連学術団体の連合体(13学協会が正会員)として、化学と化学技術の振興を通して社会に貢献することを目的として活動している。日本化学連合シンポジウムの開催(本学会と共催)、化学コミュニケーション賞の表彰などを実施している。

### 2) グローバル化の推進

諸外国の薬学関係団体や薬学関係者との交流を行い、本学会の国際的地位向上および薬学の国際的振興に寄与しました。

#### ① 国際薬学連合(FIP)に関する活動

- ・第142年会（名古屋）にて「FIPフォーラムを第1部、初の試みである「アジア・太平洋からの新しい薬科学者の息吹」を第2位部とする「日本薬学会-FIP ジョイントセッション 2022」をオンラインで開催しました。
- ・会議への出席 2022年4月7日 Extraordinary Council Meeting、5月23日 High Level Meeting、12月15日臨時 Council Meeting がオンラインで行われ、それぞれ本学会より、代表者1名が出席しました。
- ・9月18～22日にセビリアで開催された第80回 FIP World Congress に、本学会からの代表者2名が出席しました。
- ・2023年5月に横浜で予定されていた8th Pharmaceutical Sciences World Congress (PSWC2023) の開催は取りやめとなりました。
- ・国際連携活動の見直しのため2022年7月15日第3回理事会で決定し、2023年2月24日に退会しました。

## ② 交流協定に基づく交流

- ・ドイツ薬学会 (DPhG) より演者2名が「第142年会（名古屋）」にてオンラインで講演いたしました。また、医薬化学部会の第39回メディシナルケミストリーシンポジウムにて代表者1名を招待し、講演を行いました。
- ・10月19～21日に行われた韓国薬学会 (PSK) の秋の大会で、「合同シンポジウム」を開催しました。本学会からの演者2名はオンラインで参加したほか、佐々木会頭が現地を訪問しました。第143年会（札幌）では日韓合同シンポジウムと代表者交流を行います。

## ③ アジア地域との交流

- ・発展著しいアジア諸国と、我が国のパートナーシップに基づく学術交流ネットワークを基盤として、次世代の薬学研究を先導する人材育成に資する連携を強化することを目標に、第143年会（札幌）での「次世代薬学アジアシンポジウム」の開催を準備しています。

## ④ その他

- ・2023年1月10～12日にドバイで開催の「Dubai International Pharmaceuticals & Technologies Conference & Exhibition (DUPHAT) 2023」へ、主催者からの要請に応じ、講師1名を派遣しました。
- ・2020年に初めて合同シンポジウムを行ったカナダ薬学会 (Canadian Society for Pharmaceutical Sciences (CSPS)) と、第2回目となる合同シンポジウムを第143年会での国際交流シンポジウムの1つとして開催準備を進めています。

## 5 学会基盤の整備・確立

### 1) 会員関連

#### (1) 会員増強への取り組み

次世代へ向けて、より一層の発展を目指すためにも、会員は学会の基盤であり、かけがえのない財産です。多岐に亘る薬学の学術の魅力の向上を図り、会員増強へ繋げてまいりました。

会員数増加に向けてのワーキンググループを立ち上げ、会員を増強するための方策と日本薬学会としての活動の活性化に繋げるための検討をしてまいりました。

2023年6月より新会員システム SMOOSY の運用を開始し、会費のオンライン決

済に対応しました。

## (2) 会員登録状況

会員数 (2023年1月31日現在)	15,601名
正会員	15,324名
(一般会員 12,529名)	
(学生会員 2,795名)	
永年会員	206名
有功会員 (第二項)	35名
名誉会員	36名
賛助会員	212機関

2022年度末(2023年1月31日)現在、正会員のうち949名が2022年度会費未納者でした。

## (3) 名誉会員の推薦

定款第5条に基づき、理事会において名誉会員候補者5名の推薦を決定しました。

名誉会員	堅田 利明
	橋田 充
	松木 則夫
	向 智里
	森 裕二

## (4) 永年会員の決定

定款第5条に基づき、理事会において永年会員25名を決定しました。永年会員には、記念品を贈呈いたしました。

永年会員	足立 毅	磯部 公明	市川 勇
	井戸 達雄	井原 正隆	一色 捷一
	大倉多美子	小倉 一幸	門澤 弘行
	川本 寛	北澤 義夫	小竹 正敏
	杉森 健一	千熊 正彦	橋爪 清松
	藤本導太郎	細木 和	北條 博史
	松田 啓一	増田 康輔	三輪 一智
	山原 條二	山岡 桂子	吉藤 茂行
	吉田 紀子		

## 2) 財政基盤の確立

### (1) 賃貸収入と会館の運営

学会運営は、会費と学術事業収入等の経常収入によって賄われるべきものではありますが、本学会では収益事業として、会館の賃貸収入をもって学会運営の大きな部分の財務基盤を補完しております。賃貸事業は社会情勢の影響を多分に受けることから、常に状況把握を行い、管理代理者であるエム・ユー・トラスト不動産管理

株式会社と連繫を密にし、良質なテナントの確保に努めることにより、運営基盤の安定化に資するよう努力しております。

ならびに、学会が管理するホール、会議室などの会館施設の運営は、会員の利用施設としての有効活用と、一般社会への開かれた学会としてのイメージアップのため、委託先のビル管理会社と協力して利用者の便に供するよう努めました。

社会情勢を十分に鑑み、テナントの維持や、会館の効率的利用を引き続き継続して努力してまいります。

## (2) 長井記念館の維持管理

当館の経年劣化に伴う修繕計画について、エム・ユー・トラスト不動産管理株式会社を始めとする関係各社からの情報を基に、主体的に把握するよう努めてきました。現長井記念館は竣工から30年以上が経過し、今後、修繕費の一層の増加が見込まれます。理事会では、2021年12月より、常任理事以下のワーキンググループを発足し、計画的な改修の計画を策定し、堅実な長井記念館の維持管理を進めてまいります。

## (3) 壽稻荷ご祭礼

日本薬学会の敷地の中に祀られている壽稻荷(ことぶきいなり)本殿に対し、毎年二(に)の午(うま)の日に日本薬学会主催でご祭礼を行っております。本年度も、昨年度に引き続き新型コロナ禍の状況を鑑みまして、金王八幡宮の神職による神事を以下日程で執り行いました。

日 時：2022年2月17日(木)

場 所：日本薬学会長井記念館

---

### ・ \* ・ 2022年度役員一覧 ・ \* ・

---

会頭	佐々木茂貴(長崎国際大薬)	
次期会頭候補副会頭	岩淵 好治(東北大院薬)	
副 会 頭	石井伊都子(千葉大病院薬)	
	南 雅文(北大院薬)	
常任理事	吉松賢太郎(日本薬学会)	
総務担当理事	石橋 正己(千葉大院薬)	伊藤 彰近(岐阜薬大)
	佐藤 美洋(北大院薬)	早坂 正孝(奥羽大薬)
財務担当理事	光本 泰秀(北陸大薬)	山本 恵子(昭和薬科大)
広報担当理事	青木 一真(第一三共)	林 秀敏(名市大院薬)
国際交流担当理事	葛原 隆(徳島文理大薬)	林 良雄(東京薬大薬)
	矢野 育子(神戸大病院薬)	
編集担当理事	黒田 直敬(長崎大薬)	米持 悦生(星薬大)
学術事業担当理事	金井 求(東大院薬)	篠塚 和正(武庫川女大薬)
	竹本 佳司(京大院薬)	
	本間 真人(筑波大学医学医療系)	
	本村 隆尚(日本たばこ産業)	
監 事	国嶋 崇隆(金沢大院薬)	
	平井みどり(兵庫県赤十字血液セ)	
	望月 眞弓(慶應大)	

## —————・\*・—————2022年度委員会・支部・部会一覧—————・\*・

**常置委員会**

役員候補者選考委員会	石橋 正己 (千葉大院薬)
代議員選挙管理委員会	石橋 正己 (千葉大院薬)
学会賞選考委員会	湯浅 博昭 (名市大院薬)
女性薬学研究者奨励賞選考委員会	石井伊都子 (千葉大病院薬)
創薬科学賞選考委員会	竹之内一弥 (帝人ファーマ)
教育賞選考委員会	川西 正祐 (鈴鹿医療大薬)
佐藤記念 医療貢献薬剤師賞選考委員会	家入 一郎 (九大病院薬)
創薬セミナー委員会	王子田彰夫 (九大院薬)
広報委員会	楠原 洋之 (東大院薬)
ファルマシア委員会	原 俊太郎 (昭和大薬)
学術誌編集委員会	大槻 純男 (熊本大院生命科学)
薬学雑誌	富岡 佳久 (東北大院薬)
CPB	中川 秀彦 (名市大院薬)
BPB	上原 孝 (岡山大院医歯薬)
総務委員会	石井伊都子 (千葉大病院薬)
人事委員会	佐々木茂貴 (長崎国際大薬)
財務委員会	石井伊都子 (千葉大病院薬)
国際交流委員会	岩渕 好治 (東北大院薬)
年会問題検討委員会	佐々木茂貴 (長崎国際大薬)
薬学教育委員会	中村 明弘 (昭和大薬)
ダイバーシティ推進委員会	石井伊都子 (千葉大病院薬)

**特別委員会**

長井記念薬学研究奨励特別委員会	高倉 喜信 (京大院薬)
健康サポート薬局にかかる研修第三者確認委員会	長谷川洋一 (名城大薬)

**支部**

北海道支部	菅原 満 (北大院薬)
東北支部	村田 和子 (医療創生大薬)
関東支部	須貝 威 (慶應大薬)
東海支部	松永 民秀 (名市大薬)
北陸支部	松谷 裕二 (富山大薬)
関西支部	二木 史朗 (京大化学研)
中国四国支部	宇根 瑞穂 (広島国際大薬)
九州山口支部	山口 泰史 (長崎国際大薬)

**部会**

化学系薬学部会	赤井 周司 (阪大院薬)
医薬化学部会	国嶋 崇隆 (金沢大院薬)
生薬天然物部会	渡辺 賢二 (静岡県大薬)
物理系薬学部会	船津 高志 (東大院薬)
構造活性相関部会	本間 光貴 (理化研)

生物系薬学部会  
薬理系薬学部会  
環境・衛生部会  
医療薬科学部会  
レギュラトリーサイエンス部会

服部 光治 (名市大薬)  
香月 博志 (熊本大院生命科学)  
原 俊太郎 (昭和大薬)  
堀 里子 (慶應大薬)  
合田 幸広 (国立衛研)

**事務局**

事務局長

奈良 洋